

■今月の特選句

2014年4月号

絶間なき雪解雫と小言かな

下嶋四万歩

日本人の勤勉は、雪解雫のような小言に養われたもの。コーチに小言を言われ続けて五輪でメダル獲得。「あの娘はすぐコケル」は雪解雫？

豆いりて強面鬼の面いらす

山下正純

父ちゃんは鬼顔だから、「鬼の面」買わなくても良い。白髭の爺ちゃんはクリスマスサンタさん役に。これでもう少し稼ぎがあれば文句無しだよ

勝ち負けの五輪うんざり日向ぼこ

酒井鹿洋

連日連夜、勝った負けたと大騒ぎ。メダルの数にもこだわり過ぎ。なのに、ひと月もすれば大昔のことのよう。「今でしょう大切なのは日向ぼこ」。

咲いてすぐ散る算段の寒椿

山本 賜

日本人は「せっかち」な民族。中でも俳人は、俳誌用の句は、さ来月の季語で詠む。「植物のせっかち代表が寒椿」。「赤白と先を競うて落椿」。

娘の齢をうつかり聞きし雛の夜

越前春生

「お前何歳になったかな」「私は〇年前に生まれたのよ。お父さん」「三十歳過ぎたら齢を訊ねてはいかんなあ」。「人形は年をとらないひひなの夜」。

竹島も魚釣島も春隣

久我正明

領土問題は、国民を一つにする。条理も不条理も関係ない。俳人は時勢に疎いから吟行の対象でしかない。「春隣竹島今が竹の春(季重り)」。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

かたづかぬものに娘と春炬燵
・・・来年もまた同じ句を詠む

小林英昭

目刺焼く穴のあく程見詰められ
・・・穴だけの目で見つめるわけよ

高橋素子

見え過ぎて悩む小皺や春埃
・・・白内障の手術をしたか

川島智子

吾輩は猫好きである春炬燵
・・・猫の体温炬燵がわりに

菅野あたる

目でばかりもの言ひをりぬ受験の子
・・・風邪ひき声が出ぬかも知れぬ

柳 紅生

有頂天にさせて敗れた紙風船
・・・猪瀬都知事も紙風船さ

井口夏子

三日分生活費浮く二月尽
・・・だから嫌いさ閏の年は

伊藤浩睦

焼網の上で四股踏む栄螺かな
・・・牡蠣はぶつぶつ言ふだけなのに

飯塚ひろし

中古車のどれもそれなり春の雪
・・・雪をかぶって見分けがつかぬ

加藤 賢

目減りする年金生活（くらし）めざし焼く
・・・苦い思ひではらわた齧る

青木輝子

蜂ありて花の重さのありがたさ

・・・ニュートンさんの理論実感

青山桂一

魚の氷に上がりむくむく好奇心

・・・かと言って句を詠むわけなし

麻生やよひ

句友等と八木健師褒め梅見酒

・・・俳人やはり褒めて育てる

井野ひろみ

■今月の滑稽句

【佳作】	村童のうすらい踏んづけ登校す 蛇穴を出て太陽をまぶしめり	青木輝子 青木輝子
【佳作】	料峭や玻璃に当りて鳥失神 喜寿にまで辿りし我に春日ざし	青山桂一 青山桂一
【佳作】	介護士のまなざし春の風にのる だまって耐えている雪椿かな 水音が好き春の雀が窓つつく	秋月裕子 秋月裕子 秋月裕子
【佳作】	ルックスより物腰が好きバレンタイン 文に長け武はいまいちや実朝忌	麻生やよひ 麻生やよひ
【佳作】	恋猫の思ひとげての大あくび 刃物など研ぐからほうら春の雷 耳の日来聴く耳どこか忘れたよ	有吉堅二 有吉堅二 有吉堅二
【佳作】	親子とも居眠る縁先春来たる 鶯やケキョだけ鳴いて今朝の庭 高級車花を眺めて犬が行く	粟倉健二 粟倉健二 粟倉健二
【佳作】	春光や女相撲の土俵入り 踊り子が隠し毛見せる荷風の忌	飯塚ひろし 飯塚ひろし
【佳作】	言い訳は早口となり春疾風 鶯か鳴いた紅梅微笑んだ	井口夏子 井口夏子
【佳作】	受験ライバル憎さも憎し恋人なり 春日遅々ぐうたらペットに万歩計	池田亮二 池田亮二
【佳作】	寄る辺なき物の退くまで春炬燵 恋鳴きのパンダしばらく春の闇	石川セツコ 石川セツコ
【佳作】	朧夜の古い畳と古女房 モアイ人のDNAか蝌蚪の紐 雪だるま並べしなぞえつくしんぼ	伊地知寛 伊地知寛 伊地知寛
【佳作】	魚心あれば温みし水心 雄猫の二足歩行や山笑ふ	伊藤浩睦 伊藤浩睦
	一人居の家二三軒桃の花 春眠の夢の続きを明日とす	稲沢進一 稲沢進一

【佳作】	地球一回転して黄砂降る	稲沢進一
【佳作】	傘取られ相傘となる春の雨 娘(二)虫付き雛にたっぷり虫除けす	井野ひろみ 井野ひろみ
【佳作】	虫穴を出ずおのれの殻にひたりける 白酒の一杯に頬を赤くせし 初雷や肝を抜かれてしまいたる	今城夏枝 今城夏枝 今城夏枝
【佳作】	帰る子に妻の目配せお年玉 崇りより崇める心年新た 着ぶくれて滑稽の句をひねり出す	入江澄泉 入江澄泉 入江澄泉
【佳作】	春の海車窓におでこひつつけて 今風の春塵PM二・五 鹿の声詩歌となりぬ北風に	上山美穂 上山美穂 上山美穂
【佳作】	欠伸して喉の奥まで臙の夜 春のSOCHI滑って転び金メダル 陽炎にゆらめいてゐる不動尊	氏家頼一 氏家頼一 氏家頼一
【佳作】	葉湯の薔薇の香あふれひひなの日 寝つかれぬ吾をのぞきこみ冬の月 アボカドの天麩羅口にとけてゆく	梅岡菊子 梅岡菊子 梅岡菊子
【佳作】	二人して時間長者や亀の鳴く 茶髪の子なれど泣きたる卒業歌	越前春生 越前春生
【佳作】	転ぶなと言つて転んだ春の雪 栄冠は結弦(ゆづる)礼留飛(れるひ)と春歩む 鳥帰る還らぬ島を越えゆくか	奥脇弘久 奥脇弘久 奥脇弘久
【佳作】	下萌や犬と連れ小便とばす 軒の端に乳繰るふくら雀かな 老残の足踏んばつて豆を打つ 土筆坊袴脱がされ釜茹に 春愁や二円切手に唾つけて 桜鯛の目玉いただく白内障	笠 政人 笠 政人 笠 政人 笠 政人 笠 政人 笠 政人
【佳作】	春のものほうれん草を茹でる香も 春眠の吾を揺さぶり伊予の地震(ない) 耳奥に春の脈打つ雨の音	加藤澄子 加藤澄子 加藤澄子
	口開けて朴の冬芽を数へをり	加藤 賢

【佳作】	銀行街毛編みの目開き帽被る	加藤 賢
【佳作】	梅林や一人過ごす歳となり 梅の花近頃一人が好きになり 梅林や一人過ごしが性に合い	門屋 定 門屋 定 門屋 定
【佳作】	風読めぬ凧はひくきにとどまりぬ 浮寝鳥たがひの嘘寝知つてをり 薄ら日に活入れながら日向ぼこ	金澤 健 金澤 健 金澤 健
	床暖で頭寒足熱大躰 マンションが終の住み処に日脚伸ぶ	川島智子 川島智子
	岩走る水こそばゆし山笑ふ 席譲られし老翁の涅槃かな	菅野あたる 菅野あたる
【佳作】	ホームランの数だけもらうバレンタインデー ぱんぱんの祝儀袋や春隣	久我正明 久我正明
【佳作】	相聞の古典的なる恋の猫 外人に水車かたこと水温む しつかりと着地をきめて青き踏む	工藤泰子 工藤泰子 工藤泰子
	土踏まらずは第二の心臓麦を踏む 啓蟄や女はいつも這ひ上がる	黒田忠一 黒田忠一
【佳作】	真向いに座りて照れて春炬燵 三度目も間違い電話春の昼 着膨れてキャッチボールにすぐ飽きて	小泉花子 小泉花子 小泉花子
【佳作】	白酒に接待の味はやおぼゆ 五七五ひねつて山を笑はせる	小林英昭 小林英昭
【佳作】	食偽装はびこる国のおもてなし 和式では用のできない腰と膝 新品を買えばよかった修理代	齋藤八兵衛 齋藤八兵衛 齋藤八兵衛
【佳作】	一年振り一家団欒雛の段 いかなごの幼き黒目哀れなる	酒井鹿洋 酒井鹿洋
	春忘れ足掻くごときよ吹雪空 おひな様菓子を横目にいつ食べる ひだまりにうかれて猫のコーラスよ	佐藤義子 佐藤義子 佐藤義子

【佳作】	花曇と思ひきやPM二・五 春雪に閉ぢ込められし高速道 過雁さん彼岸を待たず逝かれたり	佐野萬里子 佐野萬里子 佐野萬里子
【佳作】	啓蟄やまず空を見て家を出る 春一番隠し干す物あまた散る	下嶋四万歩 下嶋四万歩
【佳作】	踏み入ればぎょぎょと声や霜柱 雪だるまの汚れ洗ふと泣く子かな 艶話みな知っている焚火跡	壽命秀次 壽命秀次 壽命秀次
	なけなしの金をはたいて春財布 春眠の生前葬の棺の中 予報士の期待裏切る余寒かな	白井道義 白井道義 白井道義
【佳作】	土筆んぼうすうす増税気づいてる 自転車に雪と手話たくみ くるくるスケートそのあしに初土筆	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
【佳作】	風光りYシャツ着てきスニーカー 日頃からコツコツ努力山笑ひ 春風や顧客満足資料有り	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
	自転車を引っぱる犬や山笑う 美少年きれい答案落第す 新社員優秀すぎて手に負えず	高田敏男 高田敏男 高田敏男
【佳作】	化石とも木乃伊とも言はれ春を待つ からうじて紙雛だけを飾りたり 鬼の面豆ビシバシと園長先生	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
【佳作】	春はいずこやイカナゴの釘煮食ぶ さよならは言わずに閉める送別会 春を寄せつけぬ弾丸低気圧	高橋マキコ 高橋マキコ 高橋マキコ
【佳作】	ほろほろ酔ふ自棄酒の甘酒に 千円札万両の鉢に両替す	高橋素子 高橋素子
【佳作】	早春や自律健康法したる 春浅し肩の力を抜かねばの かたくりの花滑稽の句を詠むか	田中 勇 田中 勇 田中 勇
【佳作】	意味不明変体仮名の賀状受く 蛇振りし餓鬼大将のすぎる杖	田中早苗 田中早苗

	獺の腹満々タンに春の朝	田中早苗
【佳作】	隠れ食ぶバレンタインのチョコレート 朝寝して信号待ちで眉を引く リュックサック同型同色山笑ふ	田村米生 田村米生 田村米生
【佳作】	見おさめと言ひて今年も花見かな いかなごの釘煮我が家も秘伝あり 気に入りにて一年中着るちゃんちゃんこ	津田このみ 津田このみ 津田このみ
【佳作】	浮かれ猫夕餉の道を闊歩する アナウンサーどうもどうもと山笑ふ ヒトカラで鶯気どる今宵かな	土屋泰山 土屋泰山 土屋泰山
【佳作】	どっかりとオーバーステイの春の風邪 変り雛後日相談肖像権 春愁や眼鏡を捜す眼鏡欲し	都吐夢 都吐夢 都吐夢
【佳作】	寝足りても去らぬ眠気を笑ふ山 見るたびに北指す磁石四月馬鹿 尺八の揺り音にゆらぐ春の月	永島董玉 永島董玉 永島董玉
【佳作】	三月の納豆菌のねえばねば 春分の日のお日様がにっこにこ 春眠の脳のおおかたぶうよぶよ	西をさむ 西をさむ 西をさむ
【佳作】	風光りステンドグラスの帆もきらり 洋館に咲く花揺らし古硝子 春光を鱗で先取り萬翠荘	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
【佳作】	携帯震う雪の深さの変はるたび 寒波衰ふ短期記憶はことのほか メールして忘れる漢字万愚節	原田 曄 原田 曄 原田 曄
【佳作】	善人も悪人も居り節分会 鬼は内鬼は外より声高く 鮫鱈の吊るされている口達者	ひがし愛 ひがし愛 ひがし愛
【佳作】	羽根布団掛け天国へ行った夢 うららかや人の噂の四捨五入 香水の見本一噴き同窓会	久松久子 久松久子 久松久子
【佳作】	東北のこと忘るなど春の地震 娘より人形を誉め雛の客	日根野聖子 日根野聖子

	人形に様つけて呼び雛祭	日根野聖子
【佳作】	春光や引き潮ひろしはまやらわ 長靴喰ふ二月の雪のシャーベット 一度二度深雪禍春の首都の体(てい)	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
【佳作】	コンビニの前にかまくら出来上がる 寒ゆるみてもウルトラライトダウン着て 寒ゆるむ気がゆるんだら句もゆるみ	藤森荘吉 藤森荘吉 藤森荘吉
【佳作】	女神の囁き寒漉きの水の音 解かれて冬日にまぶし絹の紅 満開も余白も美しき梅の谷	藤原セツ子 藤原セツ子 藤原セツ子
【佳作】	初音かな枝から枝へ飛び移り 法筵に母の育てし花を活く 顔近づける三極の花の香に	松井寿子 松井寿子 松井寿子
【佳作】	爺婆のはしゃいで作る雪だるま 雪だるま小さなペニス誰が付けた 深夜帰宅ひたすらに食ふ撒けぬ豆	松井まさし 松井まさし 松井まさし
【佳作】	里親にあいそ啼きする子猫かな ぼつくりといかぬこの世の寒さかな 独活室で演歌を唸る与作かな	松尾軍治 松尾軍治 松尾軍治
【佳作】	列島が大童なり春の雪 冬五輪三十路四十路の意気地かな 大雪やスカイツリーの半身喰ふ	丸山絃一 丸山絃一 丸山絃一
【佳作】	痴話喧嘩みてるほかなし守宮君 まなこ閉じ春光受けたらまっかっか タンゴかけ口笛で和す春の宵	三橋百笑 三橋百笑 三橋百笑
【佳作】	トンカラリンと水車の遊ぶ芽木の山 万作まんず咲いて盲導犬の大欠伸 春光や湖畔に釣人小さくあり	宮森 輝 宮森 輝 宮森 輝
【佳作】	春泥や空地は子らのパラダイス 雛納め急げ急げよ夕鴉 金鳳花こんな小さな径だった	百千草 百千草 百千草
	菜の花や川の流れに添うやうに 春一番負けて笑顔のにらめっこ	森岡香代子 森岡香代子

【佳作】	いつまでも他人行儀のお雛様	森岡香代子
【佳作】	氷雪技ソチは観たかと殿の声 この婆や夢が浮かばぬ雛祭 春来れど八パーセント寒くなり	森 要 森 要 森 要
【佳作】	草食の胃を喜ばす春野菜 焼き上げて化石となりし目刺かな しかと押す就職身元保証印	八木 健 八木 健 八木 健
【佳作】	吾輩も恋したるごと猫科なる 春一番モンローばりに手で抑へ 早合点さておやしかし四月馬鹿	八洲忙閑 八洲忙閑 八洲忙閑
【佳作】	場所とりの万年補佐の花疲れ 血統書付きではないが新社員	柳 紅生 柳 紅生
【佳作】	あら嬉し春の香のバツケ味噌 申告も終えて子猫はニヤンと 春場所を猫も茶の間の応援歌	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
【佳作】	学窓の日日重し春隣り 雪の松緑久しき双葉かな	山下正純 山下正純
【佳作】	川蝉を飛び立たせたるシャッター音 真直ぐよりひねくれに味花を活く ひよ鳥の恋の対決決着す	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	人見知りする子に春蜜柑貰う キンポウゲにもいろいろラナンキュラス	山本 賜 山本 賜
【佳作】	幾度も雪の重さを尋ねけり 新品の靴を下して梅見かな いかなごのぴちぴち撥ねて春来る	渡辺さだを 渡辺さだを 渡辺さだを